

プログラム解説

～解説に代えて～

津軽平野と岩木山が目につかぶ……それが「津軽民謡」

「民謡」という言葉は意外にも新しく、使われ出したのは明治中期からです。しかし、それよりはるか以前から、津軽地方や南部地方で歌われ広まっていました。仕事唄、遊び唄、道行唄、祭り唄、祝い唄……。のびのびした豊かな自然、大きな岩木山、長く厳しい冬……。その中で永遠に歌われ続ける民謡は「心のふるさと」そのものです。

鎌倉時代から室町時代の頃、安東氏による統治で現在の十三湖（十三湊）には様々な物資が運ばれてきました。その頃、越後の“ごぜ”により様々な唄や芸能（祭文松坂）も伝わったのです。明治10年頃になり、独特の唄や太棹（ふとざお）の三味線が生まれてきたと言われています。

現在は津軽五大民謡といわれるものがあり、以下の通りです。

津軽じょんがら節：最も代表的な津軽民謡です。旧、中（なか）、新、新旧節などがあります。慶長27年、現在の黒石市浅瀬石に生まれました。

津軽あいや節：九州の「ハイヤ節」が日本海を北上し新潟（佐渡）で「おけさ」となりました。津軽に入って「津軽あいや節」となったと言われています。

津軽よされ節：寛永初年、現在の黒石市付近の農村に住んでいた与佐部郎という人を歌った唄といわれています。村民の集まり等で、目上の人を嫌うことから追い出し策にも唄われたとか。「前囃子」は明治の中頃から広く流行しました。凶作の年は早く去れと祈る「世去れ」という説もあります。

津軽おはら（小原）節：大正14年、故成田雲竹氏がレコードを録音した時、以前は「塩釜甚句」という名で歌われたものをオハラーと唄うところから「おはら節」と命名しました。現在の歌詞では「春は桜の弘前城～夏は緑の岩木山～秋は十和田で紅葉狩り～冬は大鰐湯の香り」と、津軽の四季を表わした歌詞が魅力的となっています。

津軽三下り：駄賃付の馬子たちが流して歩いた唄といわれています。

その他にもこのようなものがあります。

津軽甚句：天文初年、新潟県柏崎地方から伝わったものと言われています。別名「ドダレバチ」。農作業はもちろん、いろいろな催し物で歌われていました。津軽地方放言たっぷりの盆踊り唄です。

りんご節：戦後に誕生した新作の民謡。昭和29年に故成田雲竹氏が作詞・作曲。当時青森りんごのPR

本調子 はずむ

津軽甚句

に一役買うためレコード録音するにあたり**故高橋竹山氏**がアレンジしています。

津軽山唄：尺八の伴奏で歌う、詩吟にも聞こえる朗々とした民謡です。

弥三郎節：文化5年、西津軽郡森田村（現つがる市）下相野で生まれました。全国の民謡の中でも珍しい「嫁いびり」を歌った唄であり、昭和26年文部省文化祭に故成田雲竹氏が出演し、レコード録音するにあたり、**故高橋竹山氏**がアレンジしています。

十三の砂山：現在の十三湖。興国2年の大津波と大火の前、かつて東日本最大の貿易港として繁栄した十三（とさ）湊にまつわる唄であり、本場の十三村（市浦村）では小太鼓だけで唄い踊るものとなっています。昭和26年文部省文化祭に故成田雲竹氏が出演し、レコード録音するにあたり、**故高橋竹山氏**がアレンジしています。

ホーハイ節：ヨーデルにも似た独特の裏声で歌っています。

謙良節：格調高い祝い唄であり、津軽山唄と並んで人気のある津軽民謡となっています。



胡弓により演奏されるものは、「**おわら風の盆**」と呼ばれるものです。

おわら風の盆（おわらかぜのぼん）は、富山県富山市八尾（やつお）地域で、毎年9月1日から3日にかけて行われている富山県を代表する行事です。越中おわら節の哀切感に満ちた旋律にのって、坂が多い町の道筋で無言の踊り手たちが洗練された踊りを披露する風情豊かな行事です。艶やかで優雅な女踊り、勇壮な男踊り、哀調のある音色を奏でる胡弓の調べなどが来訪者を魅了しています。おわら風の盆が行なわれる3日間、見物客が八尾を訪れ町はたいへんな賑わいをみせています。

おわらの起源は、江戸時代の元禄期にさかのぼると伝えられています。それによると、町外に流出していた「町建御墨付文書」を町衆が取り戻したことを喜び、三日三晩踊り明かしたことに由来するのだということですが、詳細については判明していません。

「風の盆」の名称の由来については、風鎮祭からともお盆行事からともいわれますが、はっきりとしたことはわからないまま現在にいたっています。

